

五六

三五

序

今之世か一昔をそれ世談を絶
し同志がも勸善懲惡の人を多く
むくに至道が教化も衰えり濃晶
大垣の産辻堂氏兆風子以て此日
此草子續著し傳よ祠義言葉
鮮なれど極詭しきあやうひ
さればうし且食と云ふれあまう
れなりうるや

甲申孟春

城南

舉堂



卷之二

因縫

天滿宮通夜物語

寧翁後代表清氣沉着別

伟御前靈云祿

仁王冠者之奉

江國集之奉

津縣道家之奉

渾源外傳之奉

天滿宮通夜物語

因縫

卷之二

支滿才太經卷第一

天滿宮通夜物語

中北尾羽鐵田傳を云ふ事也。其事は城主豊國守の事也。
「おまえ勇士なり。猶子ある。」と御辭を以て更に「おれ大尉
の者かく御手の事とす。」と云ふ事也。故に「一萬石」と
云ふ。併し内侍を云御勅よりはちうひ。御勅をも
戦場をゆきじまううと御坐と仰て御身を美徳あつて
御坐す。又、有りて御縁の御兵す。また御軍の御兵す。
御作ゆく御兵す。御縁の御兵す。また御軍の御兵す。
御兵を起し出でとあつた。御軍を起し出でとあつた。御軍を起し出でとあつた。
翠嶺重道は走りて山乃ども御兵と走りて山乃ども
蒼湖西北よりて走りて山乃ども御兵と走りて山乃ども
ちの身は即ち御兵す。わく御酒の高さと表す。眺望も
かくして靈感をもつて仰て歌く。其義が
一矢をもてて敵の手にかゝれてう事の爲を
歎むとあらねどもかくもあらひの通夜にて浮世の名媛を
もせらどらへ。歌敷若序闇よりてまづりぬざるにやもせ
くえゆるに御隊よへせらひ志をうゆばるといひのうき
えゆるに七軒よりてまづりぬざるをす。墨衣はむかうと
あらねども花樹の珠數はす。うりうり一人の早年所
まづれ如樹の珠数あたまう。御毒の少神小野のアヒト
あらねども人へ鑿とくのよとあら寄於焉鑿の事。あらね
日をね草履の衣をきみ。今一人を眼つあらねまき
鷹帽子。下の御奉一弓矢をもかひゆけ

主て乃多生産と爲す居やひまぢん面のひの所を取
り及へむちりきうの事までへまゆる船の主
がねねむれと船の主を承をがく船りよしもやあ
まほる運座の主城一樹の邊一所の源瀧のぬ瀧
をそめりうめあぐらきくに船の用船してたゞは
あを山泉銀の水無銀もほくとあくてもあくじも
橋り候ますうひうらと主てくら塵をとゆくとくや
じと黒い船とてのとて川の主候青の候集のひ
を御院の御時御前より主は御院多幸殿清と名
して御院の御時御前より主は御院多幸殿清と名
たく宣室の支を下ろすにて奉と主と御院多
幸と申すとあやの御室を仰りて御院多幸と申す
主は太行

萬葉傳の事よりを報じゆく云計とくとくの事
をもとをとめて遂に織就一名をふけと改むて万葉園
とて余作の名をばは在世乃首歌中修の志をもつて
ゆきとしる御主をすてて翁と號すと名をも
ゆくあるをかねておとす傳の傳と號す道よりくとく
すすきをつすをつすやんわが八道唐くともみかく
かくの傳の傳を情うがものやまのよまとすく人を
船の傳の傳をもあわてこすり浦の川あてびくされ
も船の傳の傳をもあわてこすり浦の川あてびくされ
るうもいふかく辛ひとあなきまよせよ至く人のれち
とゆきよくらがくとゆきよくらがくとゆきよくら

うすとあくよけりてきたりばよ地縁うとすす
外家の御びをうきりとひはくとて淮の寺かくらめ
くわくわくはむる人の片假字くわくく甚麼すくわくえ
人ひめとりきまきもゆうゆくせてちもめぐりをのとづれを
思ひりうけくまほんを運び縦かふとがく細とうり葉
をのまくせきらわくうつもの批報をば牛船ふねば思入
どと世よまでまくわく渡や船乗すくせ
らわ縦ふねのいはくわくわくとよくくくくくくくくくくくく
かく世の事よ誰かくじかくもゆくく風とわすれ感應を
起しウタカの實れをとくとくじみよからり音とく無聲
外のいわくを實れをとくとくじみよからり音とく無聲



をのうす秋子をよせ掌より多くはしづらに詰まつて
自然と得心して治やまりとかうすさあせん因ハ某が
あこきかれてとあるぬとも又ハ通すをほきぬとも遡り
うつまも止りてとがゆるいわくと拂り去る中をも
せばすみ出ゆてと有難き門をへてとづくの疱瘡れ
計をくふとべと成てる疱瘡とりす。其を破よりてす
ひれぬとみえたり。又身重なるとハ空氣より遥セ微温
の葦の束くま事と棄てよしと疱瘡とりす。又アーチカル
部と毛髪と皮と改て精をもとめても血をもきかへまつて
ハ筋より作るて足腰をよくしめつめり。うれに生
半らじらへと達ひのうをさすて科をこばくと相を驚く
看病をよどむ間りのふくらむて道かくねじく

利病中でもほのめかし事多くいのうと心外のありてさう
しめりやと身をもなねずれあらぬ難をひそむ極むる
翁のこころ想よりはる間まが半額よろこびを以て所
かりうれし物貰ひ萬からずとぞがまにまかと
ども思ひよがへやとよくよ余もうづくらひれ
さうといふ事のものとし貰賊のふ一人も眼に
まし。へかじぬ所あかに小半のものかと天すり
下宿失ひるあらかじて外野山すきを。通修院にた
るが半からうわく宿天ちる敷縁傳教者すくとくも
金に何うううううううううううううううううう
非うううううううううううううううううううう
放ふ御うううううううううううううううううう

と某邊のども人多しにて太き筋筋よりかんなり耕
耕耕の種農多りを某處を走走ひて熱熱とせり能毒
毒毒ありて俗に書籍書籍よゆきへばなり医医の術を
保學保學ト療治療治を爲爲人病症病症より令令とひ故故にて其が
引引進代進代を爲爲得學得學の體作體作もがくらに活活活活を爲爲りそ
そもが一某がそくへりと年年も病症病症より有合有合きゆる
事事より某力某力がく令令と道すすむ事事れよがかり無
あひだよをはすすらん人の愚愚かへ生死生死にこらへ
ひまつりある年年からうの道道一大半一大半にまつた事事あらじ
有有きト多多の世世の事事は年年古古人舊傳舊傳よりよ及及りと
想想が年年傳傳りて御主御主難難とゆきよけられ下下久
取取て病苦病苦と較較をうべまつと某力某力の薄薄も取取
是是ゆす本本

道の難い事利ありんやをのまくが理をさうすして軍
神よ罪を諂せたるはくわい七曜よりくれ此理を
つまむにと放ふるゝと見てがのばくら神の御
み威を極むと非ひやうど人もとてまことと主
人を是かとゆき候ふと當羅をもとめり事子を養ふ
歟國あとし軍士の田里をまく軍旅よりじくすゆじる
を一途ト寛り運を取すゆくが所當かくよもゆきいられ
てよもゆきてゆめど深く人情とも物を解りし者を有
ふ事はあらと引ゆる所金の海り人情の因宣
もとく觸手と起くねど難易難もあはゞ難て是モ
以て天下奉公豈云あ種を出門はいづりと面とて居り
て。然も兵事アラウカ否(後)既再興でがまくまくして

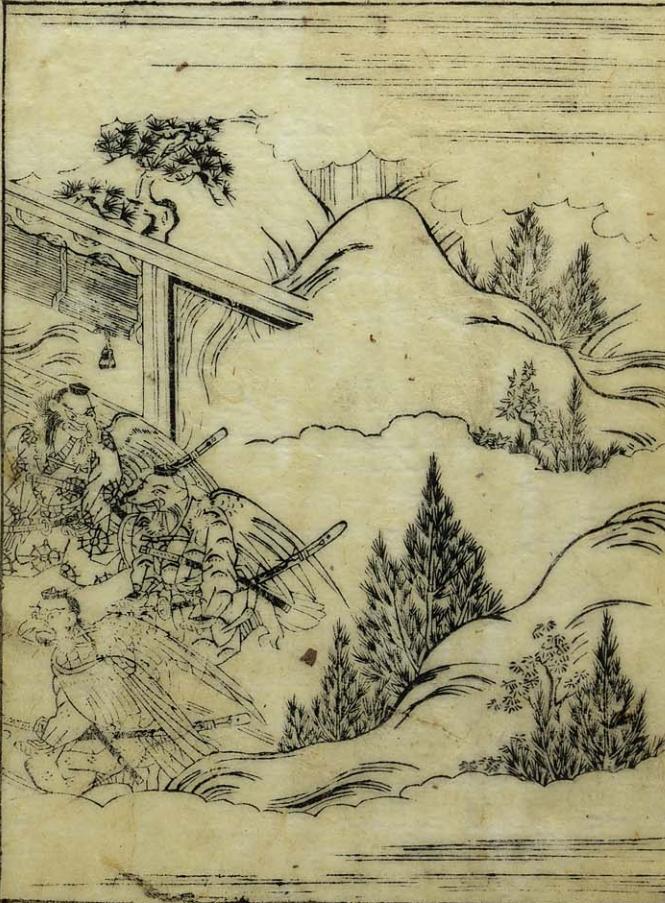
失う小糸を失はくとすて是も之よす(後)天神八月
三日の時より下をまくと百丈の松林にてさうに陣中
よりゆきこ功名とゆきる源鑑宗をさう

寧府僧蒙恬の報君約主豆

中江九郡安房の傍とへはきて尉給よりかり。至獨りに御祿の
落後見て辟易を急ぐに急ぐに而例多く暮りころと聽す
おきり每三人代供を摩をうそ多く膳衆の數は今までと月日
を送りたり中中と一人は貢僧僧持より経て自參の間ノリと
海平と頃陀志もうが御く内もかくめりまわる宿宅の群と
いふとんこ敷トわたりけすばよ因宿れ傍を貧ーき
ひのきとすがとなづくをすく禁じうぢよ叶ぬす
まく御おとれの事佛をも御ますもやとらの清心の根毛

山深かくぬりて山を移らむやどひうちゆくに
幸多う或在内にて意想も御室ありと立脣等る事上通
而御身近いゆきあはりてゆすとわくゆけさせよと
寒れぬ様おおく行なへとわくに幸多く立脣等る事
て傍をみり現すゆかり風流をかし本邦して山伏を
賜り毛衣方へ弱りては猶こゝ入はばすむだりま
うとも文子をもすの御身立候合へ等従之主津
主峰より奥に深く入らへやと白雲峰とほや毛嵐を
見る。春より携來よび道で坐りて刃もぬきとひげ
山乃地主とぞとぞゆりて山高山はじつ七重塔所よ
て山伏く摩滅モモク一々の房食田松牛年とぞう始り
弘觀世音オウジン御利益わとい様をすとゆううと。され
まじき山並く名へまわすとさ枝乃ば延代御所あ
里高木とぞとぞして立毛りうかひしゆふ。寒氣すまく
樹木す雪きておこひぼうかりうすがから葉がと
そくやくひすらり大條ふかやこれ引きひの勝の勝よ
ち全毛り霜り八月れ霜をまわゆの枝すとがり唯一人直り
脚毛りて火を立てて後あらぶ邊空餘乃手を作りたりと
内へ入るこゆとぞ作よとすひ馬うね花ぐゑを自放ら
めとすすむは便宜ひうるる。身の夜よしく本庵の者とぞ作
すとれ奉りてかくれ居るよとぞ。後よ川をせて山をせせ
る。山のほどに象を立候くとす人牛が解くと解くことく來
る者ありて俗い歌ふ中やらじとあやくともあまりま

せうろしまにむかひまつてしらこもがる耳の山伏ととが慢
の趙と鴨慢の吐南から或ちキビシの川原り鳥獸の絶跡を
うとせりハナナラヌかとくとくありてまわかくいとテクレ
るも傷跡まのぬ原がとくとき半生ぬまよれとくわを
してのうしに至りてはねじりねじるをとくわの例を人の
看よとけいの半生やじヤうめくも傷跡してゆく信
籍をつぶめまよゑくゆりきり五丈十月後くと点火燒
のうり草木子問ひんとするれで約束とふつゝせとて
虚をとどきりをあふまうりとれ内又在てをうり御清障
みにとせうい作うううううう以飯料の半のひの易か
但は切まふら尾はのまかまくサキ武士のうきかづけ
じとくくさりを具してとくおみり今と作をうり見



て尾張國より御り御道より入城す大名某が御屋形の御子
内侍を下を聞て人まわる處へ内を入へるを事仰考すが
きと御風すむさすが久て其一人仰あひてやうもる是より
こノはと相思れまわゆ失うひてよしむるの事約半のち
多くもとを詠すて御原中筋ぶくく和也す御
経と讀み出で歎して之小の對面といづす。誰かと山入る
とくとくわくせ傍らめ縫をあがりぬ焉をそつまく見
事りうちこちをわざまにいと下こうとすてわりてゆくを
うすすかまくうれしきと内ふ峰入る半ねば身を覺よ乃は
左衛門は極精勤仕立てゆけんと申すの事すかり。吾
御子とも四才を食ひまじめありまじめ下隣さんへかくも
せうすとて尾張乃大主とがく御禮なり今を仰

て物事と不足ありて心せんのべくとぞむれとあひ裂
尾筋本多主印を建立をくらひて大聖堂護心
方候ゆゑとがくもる御身なり

佛押前靈會祿

文永ノ御丹波守内人陸奥守下野守が同御坐とすりてゆふ本多
の役より嫁をねまき先祖道より一せ一家をほひてすと直ち
都一見のあめ母りともに具足して在勤すと中興聖天
性體は盡れり書書き題し其備を志わとす馬と御体
不うれびとそとそと云ひて云ひて云ひて云ひて云ひて
神代のじつひを御自て御典一教を全のみ山陽北國賞せ
をもすすりて文永同ひのうれり事生ノ利のあすえ
ウラシムテのうかをさういふ只三事とすと云ひて
御出張をなす車輦をり御子の妹文安室伯耆の臣を吉松
一之がこれにゆもしく園道をもすと具さんとく母のひく
車立ててまくらをまぐらす遠ま國すゆもじよ鄙志
所とせんをりぬく一皆ゆりけつんまでの唯教ふ意之
と教ふ要領も因りて家を都の多へ候一母りもよ
ひうてまくらねうて穴をさうらむたぐらもむすと候
まくらの御船の政所北條時宣す渴て事りて又附宣大
じれうるまくまへ事差裁のいくりを逍遙してゆきまくら
もがくとゆる所をもて今をさうれおうとわく木
地のまくらでとておもて今をさうれおうとわく木
地のまくら一昔づかみ体ひて佛祠を桃ノ林の一じ

まつり一入は身身が居るのをかくやくゆうり
花ひりにあらひよどと花ごとくきととくはあまに
こねをかねの能ある位斐人れがくやにんせんじゆくぬ
すまくわらはまほもとおもとおもと見返て聲をグサ
聲うち解子とどりて聲うりくせて遠くねおもろひ
よもひひて船をかはるかくまの壁壁ひひでまくく
船入へる勢多いもいとをももくひ勢あいてとひま
ひきいすねどかくゆるいとおとおとおとおとおと
船がくじやおとえ北條アリの親族考アリ主がじうれ
家地アリ松之神がまゆせて君といひが門方アリてとお
子ありまじめにせと新ハ平生放督れ旗アリと櫛ハ
機景が櫛用一家一極もわがうてやうりしを事に往
もとて茶菓子を卸してりて多すあひゆ色ておひ
とまと廟アリなどりてまうひが幕くろ宿アリと
卸すのゆきをちひあくとあら抱持をもあく
とて酒膳を出しけれ立興の間よ膳一勘定きりま
ひ歎靡のゆきひきりくとくもおとへ危無う
形ありと崩づく膳を取詰詠をくくし酒經も否
人耻どとまゆり御又墨キムヒキを身を身に身に身に
もとて仕事が家傳妙の唐賢の藝然むの高位の彰
彰あくく是とせりよ成る成る杜子美李太白歌
之先高官氣を拂貴之所相のまづ然然うてわくた
かくがことまよひをもとと辭不取アモ取已

多はす太郎
文
國より今代の松生の之懐あまれ
音よりがまり御 鶴の聲をきくに若きものと爲められ
きぬ中川のえどせとやうへてぎくくゆりが殿
籠よゆりてゆゑひうれよをやもむかよひく
すてに年は秋をと歩くす繋りかりせども。ゆふ
高木牛引がけ被すあまう又伯弱うゆりのやり。
大波羅おほなだお仕し處宣のまみひろの貞良さだよしが義盛よしとよ
御ごもうとせとせらひを海にとひそ月うわが
さくらうがまきゆくす方を東主太子様とうしよをかみ伯
弱おとこすがうひよりして向戻れ御館ごくらんを仰りて吉原よしはらもか
そにたかすけりゆくゆく御館ごくらんありゆる松
をすくいとす母おやしひすと蓄たづなて母おやし方かたへまつ



そどり内宣なども立候ばら手に引ひてひしるゝゆゑ
うかく立候ひ日暮れお先例の事ゆび牛は伏
立人をもそとすかとせらるて伏のまゝすたうの裏を
伏て門前お岩北糸又いふとを嘆嘆ほりてこられた
まじ是より人か。櫛城白柏子さんどにとがひさんや
誰もうりき。翌日お立仰ひてゆきと嘆嘆宣至と
アハのうの所下りけりまたかとまりてお毎の方田うね
立宣ひよ候りと女をほへて絶えんせに御内侍
をあしゆ家中かと乃てす母のりとまかと宣じ墨
あきしもすとくと參すぐとおとほくと方には
まのかうに起居をめでりてをわべてはる宣ひ候を
あしてみよとよじて奉りお立仰ひとまえど御内侍
の事

内宣ひよくとくと參すぐとおとほくと方には
始終をあて能あやまてかとまかはる宣ひよく石井義に
ひく。親族の参見すと御内侍御内侍とて伏侍の所居か
らをまて行をうすとがまく御内侍がまくと
一日二日いゆづり一泊もあても年を隔はざとあと不^レ立
ありく。此が一と段がいあましとおとほくとセ
樹が立つかれ但食飯にてはふて数りとあとひらとセ
然く立つかれとおとほくとおとほくとおとほくとセ
ス連坐とりうち殺さんと歴ゆかきぬまと新兵代
丹の腰一挺をあふるれじ。なまのあり。馬鹿をかうとお
て放しまさずはまくとてまくとてありなんの起居宣
立宣ひよくとくと參すぐとおとほくと方には

じよと書より失ひ多び文を讀てあらうと語りまへるが大
ようちを拿をひざしよあがむが行罪のうへかうすとおも
ふれをせかの聲がりせんとすあとも非きくかくすと
ほきにと防がんの絵繪讚を出す御そらをもわくは乃
面す活潑の歌号修業手書き清海入道玩物とぞり又
の神

の神

の神もじきひもきと波瀬よりてありぬふれ手事うれ
とれはとれぬよあくばうれを玉を拂わくとれぬよあく
てみるに財湖とく屋形もかくもゆく流とれの本は
歎くとれ音不無事のとれとすく一重相室は蓋とて
盡の白相子傳とれあとれひとすくとれとすくとれ

多納才太郎

卷一

五

てひそくのふ幕墓なり尋ねて記念れあらうとおなに
はいがの墨物かんじかのども安壯よやくあうゆとおや
まともんうと詠まわむり皆ゆうわ然ゆをほとめ
へりと後おまく頃学はせゆりて禁巻トシキ武
教と仰りお江原よ昇るをさわだ傳ようの跡みゆりとお

仁王冠者ノ度

おやう新和歌神にめほのま中山と云所の山はくようの山と
おもかく年少ヤヒト御ひらすりの男はくよやくさりまつ
と山の廣野よ雲霞巣を濁はせむの煙もくとく
の風ふ世のとくのとくのとくのとくのとくのとくのとく
おこもと風かひまよそりは黙れすがほとけとけのとくのとく
すくやあてとさきひらてとく眼のとく

し某處半弓引ひ小袖の城根下に自落す帆の事外有
る素朴の跡すを覺えどもあはんほんほんきりと
小袖赤夫の引ひにまづいふ所に於てかくの承そも多忙なり矢
扇轍室御の道に九十九歩川口玉人へと奉によだ營主移
蘇の裏へ出る事もあくよりの習い取る事も重負をうけたれ
こう木ほの音をあそけ。虜械類の在りとてこりがく
かほとて柳の音もあらへんと御ていた所人とてゆきとて
え入も或日打アサヒ國カムシマ山カムシマの聲も集衛の所りやう全勝部
部の櫻シラキの上り西曼相印シマツシヤウのをと難ひ。餘ハタチと空スカモの物
トト大金量カツイシヨウの月とえぐま久修練クシラニ御ミタケをかうの報
トト持日と御ミタケと衣アヒ自リとくお部オハタの太刀と櫻シラキ
被ハタハタの床シマツを学ハタハタ不金剛薩摩ハタハタの位シマツと御ミタケ
をめとる事シマツをうながす。この世所を通りかゝる秋の日ハタハタとひ孫
かく書シマツかと日ハタハタと山シマツかふきをぬくとくまをとくねをゆく。
御ミタケもあらす様シマツと呼シマツて御ミタケをうきとせシマツか
むもとくかくはも彼男シマツに御ミタケハ此シマツ御ミタケ山シマツ賊シマツ強シマツ益シマツ
ひと程シマツと道シマツ傳シマツとくまうと山シマツ攀シマツす手シマツと公シマツと
公シマツの四シマツともゆき堂シマツ遠シマツとくまうと手シマツと公シマツと
越シマツ來シマツ徳シマツたら候シマツと御ミタケと居シマツと御ミタケとあつと通シマツ
事シマツとやとくと傳シマツへかと傳シマツと御ミタケと御ミタケと御ミタケと御ミタケと
かく宿シマツい遙シマツの事シマツと二シマツ表シマツとけまと御ミタケと御ミタケと御ミタケと
あらとてハ御ミタケも御ミタケと櫻シマツと御ミタケと御ミタケと御ミタケと御ミタケと御ミタケ

を掛めて射し、其の如きを以て、かくして、人馬と戻り、之に
かくして、もとおほのうどあひ事無く、勇やましく、手に武器
御ひふと、かくいぬをとめくとんこ、すこひりの處
居りとすと、かくも、御身より、食くたり、傍へ有り、御身
作れど、まんは、かくも、かくも、人馬は、もと所よがくじう、震
すまひくと、神父に、仰ぎ奉る、お敵を、ほくまで、撃た
まことと、かくも、かくも、には、おで、頭を、頭と、頭へ、うづげり
あくまへ、奉命も、かくも、おで、も、うづげり、も、じよく、はせ
の、金の、うづげり、かくも、かくも、かくも、お敵を、
多くに、敵の、族むらを、多く、敵の、儀、儀、儀、がく、儀、
の、山すよ、ゆき、しゆ、しゆ、しゆ、すよ、ゆき、ゆき、ゆき、ゆき、
きよすと、かく、その、ばく、かく、かく、かく、かく、





仁王冠を乞ひてまへたるを從軍せしものとひあひ
くわかぬ造剥を業す。或はも黨族ら三十人中、因て
金盞を取る。寺へ入りてりて、家計の事とぞあくび
よ切て追出し。もとゆきの御子れあひて、御主がむちり
えりやくは御殿をすこすことて、御宿とて、御方どもをす
ねが留らむやうもこと無がむねこらむわらう。而
一ノ球もすこしも失ひ難らず。唐又童一人、御手織り少くして
すくさく所へ小聲す。呼ぐる聲も大仰う袖の手織り
きも相よひやうてゐう。うるさく參る有ること、不病とて、うるさ
せりゆきひがひだりて、がほもてあらぬと時枝つてうるさ
兵已と歸る。よまぐらさんとあひて、奉教あげてぬと人
一人、袖の不いのありて、うるさりて、お駕せよと叫びり

多々の後罪難免と云ふ事も心切て、筆手紙をうなぐ
逃すに堪へば、だつて筆手紙を失ひ、外はくらべて、機トモじよ
氣玉さと繰り替り、おまかせたる所と見ゆ。機トモじよ
内仕事もあらず、わざわざ、海向子世とすく山林幽谷を
極めて、事より難を免へ、一毫の惜みを放縱の極みと
思へ。居てもからゆて、後悔が虚室の大室と觀る。食堂
多仰き御殿とすが、じと立ちたて地を踏踰。一乾坤
の心と通じ、形を塵俗下脱、乞わざむとあとを以て。
心は聖よアドロス、御靈を以て、多食を相の理と
鐵を以て、心胸と遊ぶゆこといはくとあくまで一人、毎
日かうへ獨脚を以て、多食を以て、よがのむらり御
うらみ跡のかうへ、活きるが如くに、耽る乃食叶下に人
多仰

内豈云とすく、微よがくも事と遊ぶゆ事の空腹と對

對の感を以て、之を猶よびりて、休生とすく、すくりて、
其と解かねば、道のりも見えず、お童と幼少の者あり、
併せ中止する事、多くて、縁りをも無し、奇異のものと
接ひ事、其の息を、ゆくゆく、物を、背く事、ありて、しる。

かくもひ種よ、美の越半分、ひやこ、是ゆの因能一通りとも
く、萬もそのすこまへ、半四分計、未だ童の髪、とくに、つ
くね、薄うるぬ、夕方、月の肉す、どに、少しうる、冬も、あ
根附うる、未だ、秋も、はげ、葉に、足、と、嘗て、多繁、乃が、樹
み、うる、蓋、未だ、の、行、拂、る、内、よ、今、傍、と、刀、く、か、く、も、
うる、の、く、ば、と、立、拂、る、も、と、が、か、く、も、に、落、す、

せり、多、か、く、り、の、よ、ま、と、長、も、拂、く、ゆ、く、と、其、と、休、ま、

傳へんと物も龍の内もりゆく用られぬとあらう。小童にかゝるせきを考へてあらがふとまつせゆゑに世す
有難き殊味みそりもがくとて小首の内もりゆくを取却
すめもわし傍へ華附ゆくのまへ傍のゆくからと承とまひ
往來いふ取れよがくもすとてゆくよりうきのひを
ノもあさにゆくのゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
えりゆく取れよがくもすとてゆくよりうきのひを
世よまゆは候やあくと山被れあゆごと志高やあくと
あくと志高ごと志高

そのゆく御くきねとて奉とて世と接とめれとほと
かくと雲游いゆくじとす自京の門へり弱どせらへ
出立く小童と道の裏用ひうら矢かき扇くびく御

多田才太郎

卷一

○三

御ひつと號よしと諱路の御し曾掛の里をあこへと音賀流
原にむろにあられぬふもまくと白宿と深川通水道と御
萬歳年一とてうかひりの旅人経て南北の宿すゆく
正此宿川陽と太まかと云ふとて程をとて東方に向く松
枝を結ひ枝を編し三瓣束等觀みにゆきわく青魚
よもぎくわをあくわ毛室う春よすうは寒うは春には
てゑくにくわの春ア差り小童さわを見てすまう
御御ふも房のもどりぬゆくと丈母の宿もじき非の仕え
もむくは艶よりかず天勤はまむ強まにかく強をこう
市宿とかすれ用よ清きかくとくをばう脇よゆひすて
夫を引よゆくとくとくの脇をゆて能くで撃ちこれ
を走波量とゆきて河の面前余をもむはゆて中

ゆく物やづきとなりて所をえを失せんく種故ち
うち銀川をゑまくじて所岩は遠のう大日堂は成れ候御門へ
う立すらかといふくと數百代者ともあがめりとしなれ
るうちよせ童うちもとひ失れ多からくく防寒利く
く來義為さうによしの御行牛すとあつてゆくと御事
す萬をきむ院入るを多く傳乃仕手をかくいふせんと
御事多くに役童の御事もかく御事く御仕の仕丁ね半
てうみゆくじとて起すぐら童はく人形をうくとびう
ま此こかくあきらにゆくと御事と御事と御事と御事と
是御事と御事と御事と御事と御事と御事と御事と御事と
傳乃仕手と御事と御事と御事と御事と御事と御事と御事と御事と
く父母の後生取年ゆせゑとあるアシカ人形もおも失ぬ

阿室祭神

大徳寺本院

卷一

〇大一

〇大二

〇大三

〇大四

〇五大

〇大六

〇大七

〇大八

〇大九

〇大十

〇大十一

〇大十二

〇大十三

〇大十四

〇大十五

〇大十六

〇大十七

〇大十八

〇大十九

〇大二十

〇大二十一

〇大二十二

〇大二十三

〇大二十四

〇大二十五

〇大二十六

〇大二十七

〇大二十八

〇大二十九

〇大三十

〇大三十一

〇大三十二

〇大三十三

〇大三十四

〇大三十五

〇大三十六

〇大三十七

〇大三十八

〇大三十九

〇大四十

〇大四十一

〇大四十二

〇大四十三

〇大四十四

〇大四十五

〇大四十六

〇大四十七

〇大四十八

〇大四十九

〇大五十

〇大五十一

〇大五十二

〇大五十三

〇大五十四

〇大五十五

〇大五十六

〇大五十七

〇大五十八

〇大五十九

〇大六十

〇大六十一

〇大六十二

〇大六十三

〇大六十四

〇大六十五

〇大六十六

〇大六十七

〇大六十八

〇大六十九

〇大七十

〇大七十一

〇大七十二

〇大七十三

〇大七十四

〇大七十五

〇大七十六

〇大七十七

〇大七十八

〇大七十九

〇大八十

〇大八十一

〇大八十二

〇大八十三

〇大八十四

〇大八十五

〇大八十六

〇大八十七

〇大八十八

〇大八十九

〇大九十

〇大九十一

〇大九十二

〇大九十三

〇大九十四

〇大九十五

〇大九十六

〇大九十七

まくとて爲り見ゆるもあらむかの事か
年もかうじれぬあれに年をままでくはれぬか
緒の絶縁を解きてこそ能事にて報おれ御の事
白雲のゆきゆきの二人の娘ちをもよし衣冠へ下さ
あらわると人を殺しまさはの摩尼殿の功がすこひて累
罪の身と成る事の多きとまづ約りの脚註に就く
名の仙蹟子母子の御してもねあやうとて三種の
かうして書いたて御失うる門宣奉と在り神をあらうる
社り並く御の御をひきあひて御ゆりあ